

那覇市寄宮地域における子ども実態把握調査報告

加藤 彰彦ⁱ・石川 幸代ⁱⁱ・嘉数 千賀子ⁱⁱⁱ・嘉数 睦^{iv}・横山 正見^v

Investigation about the actual conditions of children's lives who live in Yorimiya area, Naha-city.

KATO Akihiko, ISHIKAWA Sachiyo, KAKAZU Chikako,
KAKAZU Mutsumi, YOKOYAMA Masami

要 約

那覇市寄宮地域に暮らす子どもたちの生活実態調査を行い、寄宮地域の世帯状況、子どもたちの生活環境、人間関係が明らかになった。課題は「地域」とのつながりが少ないことであり、展望として寄宮地域に立地する教育機関を活用した地域づくりが見出され、過去に提言された「学園都市構想」が再評価された。

キーワード：那覇市寄宮地域、寄宮中学校、学園都市構想

Abstract

We investigated the actual conditions of children's lives who live in Yorimiya area, Naha-city. The investigation revealed the actual conditions of the household and the children's human relations. The issue is that those children has only weak tie with their local community. As prospects for the future, the possibility of community development utilizing the educational institutions located in Yorimiya area has discovered, and the past proposal "educational town concept" was reappraised.

Key words : Yorimiya area, Naha-city, Yorimiy junior high school, Educational town concept

1. はじめに

1-1. 研究の経緯と目的

沖縄大学地域研究所の共同研究班「沖縄の子どもに関する基礎的研究班」は、2011～2013

ⁱ 沖縄大学名誉教授 kato@okinawa-u.ac.jp

ⁱⁱ 沖縄県立看護大学 sachiyo@okinawa-nurs.ac.jp

ⁱⁱⁱ 沖縄大学地域研究所特別研究員 qtyxy629@ybb.ne.jp

^{iv} 沖縄大学地域研究所特別研究員 mumi328@yahoo.co.jp

^v 沖縄大学地域研究所特別研究員 yokoyama@okinawa-u.ac.jp

年度の3年間、沖縄の子どもに関する各地域、各分野での取り組みを調べ、子どもに関する活動に取り組む方々を招いた勉強会等、調査研究を行ってきた。2011、2012年度の研究においては、公的な取り組みの遅れを民間の活動が補ってきたことや子どもの生育における家庭の重要性が明らかになった。本稿はこれまでの成果を踏まえ、2013年度の調査研究をまとめたものである。

2013年度の研究は、対象地域を沖縄大学の立地する那覇市寄宮地域（寄宮中学校区）に限定し、「寄宮地域と子どもたち」をテーマに小中学生対象のアンケート調査を行った。このアンケートは、2011年に沖縄市で行われた「平成23年度沖縄市こどもの実態把握調査」の質問項目を寄宮地域用に準用したもので、子どもたちの声を幅広く聴くため記述回答を多くした。併せて、寄宮地域と学校の歴史、寄宮地域におけるこれまでの子どもへの取り組みも調べた。

今回の調査の目的は、寄宮地域の子どもに関するこれまでの取り組みを確認し、寄宮地域を「子ども」というテーマで捉え直すことである。そして、地域と子どもたちの実態と課題、展望を明らかにすることである。

1-2. これまでの調査と本稿の内容

寄宮地域の子どもたちをテーマとしたこれまでの研究報告は、寄宮中学校が文部科学省等の指定を受けて取り組んだ1987～1988年と1998～2000年の二つがある。今回の調査はその後の寄宮地域の子どもたちの実態を調べたものであり、一方で、沖縄大学が寄宮地域の子どもたちをテーマとする初めての調査研究でもある。

1章（横山正見執筆）では、研究の概要を紹介する。2章（嘉数睦執筆）では寄宮地域の歴史を振り返り、収容所生活や移住生活、戦後復興において地域の人々が教育機関を大切にしてきたことを明らかにする。近年においても、自治会が子育てに積極的に関わるなど、「地域の子は地域で育てる」意識が根付いていることを確認した。

3章（嘉数千賀子執筆）では、寄宮地域の子ども会や「放課後子ども教室」の状況を確認した。そして、文部省等の指定を受け寄宮中学校で取り組まれた過去2回の活動を振り返り、その中で出された4つの提言が今後の子どもたちへの取り組みや、地域づくりにおいて重要であることを明らかにした。

4章（横山正見、石川幸代執筆）では、寄宮中学校で行ったアンケート結果を紹介し、世帯の状況や、子どもの生活が「家庭」と「学校」に偏り「地域」との関わりが少ないことを確認した。また、「一人前として認められたい」という子どもたちの本音も明らかにした。

5章（加藤彰彦執筆）では、寄宮地域の子どもたちの「食事」「遊び」「家庭状況」が決して豊かでないことを指摘する。そして、教育機関と地域の連携を目指す「学園都市構想」の再評価など地域資源の再発見と、子どもが地域で活躍できる取り組みが今後の展望として示された。

1-3. アンケート調査の対象者と対象地域

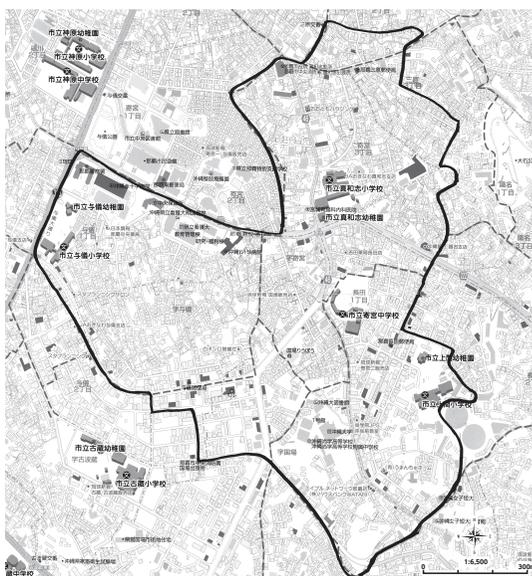
アンケート調査の対象は、那覇市立寄宮中学校1～3年生生徒611人（回収576人、回収率94.3%）、那覇市立上間小学校4年生全児童114人（回収107人、回収率93.9%）である。調査期間は、2013年10月～12月にアンケートの配布と回収、2013年1月に集計と分析を行った。

本稿では、中学生へのアンケートを中心に取り上げた。その理由は、中学生世代（思春期）の子どもたちは、社会の矛盾を敏感に受け止め様々なニーズを持っており、この世代にスポットをあてるのが寄宮地域を捉え直す上で重要であると考えたからである。

また、本稿でいう寄宮地域とは、那覇市立寄宮中学校の校区のことを指し、那覇市与儀、国場、識名、長田、三原、寄宮の一部もしくは全部地域である。

この地域には、幼稚園3園（真和志幼稚園、上間幼稚園、与儀幼稚園）、小学校3校（真和志小学校、上間小学校、与儀小学校）、中学校2校（寄宮中学校、私立沖縄尚学中学校）、高等学校1校（私立沖縄尚学高校）、大学・短期大学3校（沖縄県立看護大学、沖縄大学、沖縄女子短期大学）。総合病院2院（沖縄赤十字病院、那覇セントラル病院）、市役所支所、消防署、保健所、警察署が立地する。

また、校区のすぐ脇には、沖縄県における肢体不自由児・者の福祉・教育の中心を担ってきた、医療型障害児入所施設（沖縄南部療育医療センター 旧沖縄整肢療護園）、特別支援学校（県立那覇特別支援学校）がある。（地図参照）（2014年1月現在）



寄宮中学校の校区（実線内）
『那覇地区③「こども110番の家」マップ』（2012）

2. 那覇市立寄宮中学校開校に至る寄宮地域（校区）の歴史・概要

2-1. はじめに

那覇市立寄宮中学校の沿革は、1954年6月「真和志教育区立寄宮中学校新設認可」から始まる。

寄宮中学校は、真和志中学校の分離校として1955年4月、戦後2校目の中学校として開校した。開校に至る地域の状況について、同時期に編集された『真和志市誌』（1956）に、次のような記述がある。

「真和志市の学童生徒が人口の膨張を伴って、ここ数年来から年々増加の一途を辿り、1954年度の真和志中学校の在籍が、2,667名となり、38教室には、とうてい収容しきれぬ状

態となったので、今1校独立中学校の新設が要望されてきた。」(『真和志市誌』402頁)

その新設校が寄宮中学校である。戦後、収容所での学校再建と慰霊塔建設を優先した真和志村は市となり、やがて那覇市と合併し、戦後の真和志村史は11年間で終わることになる。特異な時期であったが学校開設などから地域の姿を見つけ出したい。

2-2. 真和志村における戦後の学校再建

戦時中、戦火が迫るなか、真和志村住民は、県外と大宜味村への疎開、そして村に残る住民に分かれたという。終戦後、疎開した住民以外は、捕虜として各地の収容所に集められた後、1946年1月に摩文仁村米須及び糸洲の収容所に移動となった。

移動指令から5日後、収容所にて金城和信氏が真和志村長に任命された。金城村長は1週間後、米須収容所内で元教員(訓導、助教諭25名)を招集し、児童数774名の真和志初等学校を開校させた。

10日後には、464名(職員16名)の付属幼稚園を開校させ、さらに2里以上離れた糸満高校へ通学する生徒のために糸満高等学校真和志分校を設置させた。また、摩文仁村糸洲の収容所においても、真和志第二初等学校、第二幼稚園を開校するなど、この年に小学校4校と幼稚園2園及び、高校の分校2校が収容所にて開校された。開校時の校舎はテント小屋である。1年後には、茅葺き校舎となるものの、台風により度々倒壊したという。真和志村民はその都度、資金を集め、自ら労力を提供し台風により倒壊の校舎を復旧させた。

『真和志誌』の「真和志初等学校の沿革」に次のような記載がある。

「1947年7月21日 後援会役員会を開催。校舎建築工事につき左記の通り協議決定。

1, 国頭へ資材運搬に行く労務者を各字から出すこと。2, 資材と交換すべく芋を各字から供出すること。3, 資材が揃ったら各字1棟宛建設すること。4, 工事雑費として、人口割り(一人4円)に寄付金を出すこと、寄付の総額15,000円。」(前掲書307-372頁)

その後、校舎建築費7棟分が、翌年3月民政府工務部より出たため、工事に関係した部落に払渡したという。厳しい収容所生活の中でも、学校再建を優先した村民の格別の思いと地域住民の一致団結の様子が伺える。しかし、「従来純農村であった真和志村が自然発生的に都市的形態を帯びるようになり」「人口も又従来2万人から激増し僅か4、5年にして今日6万人以上を算するようになり地域的に膨張する傾向に至った。」(前掲書6頁)など、戦後、地域の様子が一変する中、米軍施政権下での学校教育を新たに体験することになる。

さて、学校再建の他、今日に残る慰霊塔を真っ先に建設した真和志村民の業績は、今も語り伝えられている。摩文仁村にて学校開設と平行して住民による遺骨収集が行われた。

1946年2月、県内初の慰霊塔「魂魄の塔」を設置し、戦没者合同慰霊祭を執り行ったのである。特に真和志村民は、この地で最期を迎えた学徒隊の慰霊に格別の思いがあった。

戦前、真和志村内には、「二中をはじめとして女師校・一高女・開南の四中学校があり、屈指の教育市と目されてきた。」(前掲書364頁)「真和志村民にとって、学徒隊の終焉地、摩

文仁村米須に仮住居を置くことは、何かの因縁であることを感じた。」（前掲書264頁）その思いが慰霊碑になった。

真和志村民には、この地で最後を迎えた学徒隊の慰霊に格別の思いがあった。村民は浄財を集め1946年4月、「姫百合の塔」「健児の塔」を建設し、慰霊祭を執り行った。その後、村民は摩文仁村を離れ、地元に戻ることになる。そして、1953年、真和志市となり、1957年、那覇市との合併により真和志市の名称はなくなった。

戦後の真和志地区の主な出来事、推移は次の通りである。（前掲書267-269頁より作成）

- 1946年2月 真和志初等学校・幼稚園、第2初等学校・幼稚園、糸満高校真和志分校設置
魄の塔建設
- 4月 「姫百合の塔」「健児の塔」を建設
- 5月 第2初等学校、幼稚園は真和志楚辺初等学校、楚辺幼稚園、安里初等学校に改称開校
真和志村、摩文仁村収容所より豊見城村嘉数へ移動完了
- 7月 首里高校分校設置
- 8月 国場区、仲井間区移動開始。真和志婦人会設立
- 12月 豊見城村嘉数にて安里初等学校から分離し、大道初等学校開校（1947年大道に移転、1957年松川小に分離）
- 1947年1月 1部区域を除き、村内移動許可となる（11月末村民12,641人）
- 3月 真和志初等学校4年生テント教室で不発弾爆発事故
役所が現在地移動を許可
- 4月 大道幼稚園開園。真和志青年会発会
- 1948年4月 6・3・3制実施。真和志初等学校（8年制から真和志小学校、真和志中学校）となる
真和志中学校開校（校舎がなく各小学校で6月まで分散）
この頃、寄宮が国場、与議から分字独立（正式には1980年正式に分字）
- 1949年1月 三原区、平野区、松原区新設（村民20,752人）
- 1950年1月 真和志村役場の完成
- 1951年7月 安里区と松原区、9月15日までに立ち退くよう、軍より命令される
- 1952年4月 「琉球教育法」にて初等学校より小学校に校名変更（村民45,000人突破）
- 1953年10月 真和志市に昇格
- 4月 安謝中学校開校（真和志中学校校区北部の4地域が分離）（1954年村民53,773人）
- 1955年4月 寄宮中学校開校（真和志小、楚辺小校区対象で真和志中学校分離）
- 1956年11月 戦後初の私立沖縄高等学校開校（1983年沖縄尚学高等学校に改称）
- 1957年12月 真和志市、那覇市と合併

2-3. 寄宮中学校の開校について

1948年開校した真和志中学校は、真和志村全域を校区としており、4キロ以上離れて通学する安謝、銘苅地区を対象に1953年、安謝中学校（1962年、安岡中学校に改称）を安謝小学校内に分離開校している。通学困難を理由として300名が安謝中学校に移動したが、翌年の真和志中学校の在籍者数は2,667名（38学級）となる。戦後生まれの世代が中学校入学を迎えていたのである。

真和志市教育委員会では、1954年4月に数回にわたる委員会を開催している。寄宮中学校を寄宮地区1班の洗田原の高台を整地し設立することに決定し、同年6月15日に寄宮中学校新設を中央教育委員会に申請し、同月26日付けで認可される。

直ちに、工事建築に着手し、12月には竣工。校舎はブロック2階建て2棟14教室が完成した。続いて、翌年（1955年）2月18日、14教室が完成し、校長富原守模、教頭阿波連宗正、教員男性18名、教員女性15名で同年4月1日の開校となる。

開校について次のように記されている。

「開校時の在籍は、1年402名、2年454名、3年592名、合計1,257名25学級で、新入生以外は、真和志中学校からの分離入学生であった。校区は、真和志小学校及び楚辺小学校区域の18区で真和志小学校区域は、繁多川、真地、上間、仲井真、国場、寄宮、大原、三原の一部。楚辺小学校区域は楚辺、樋川、古波蔵、与儀、壺川、松尾、二中前、平野、宮城。」（前掲書402-403頁）

寄宮中学校は、校区が広いと分離校を要し、新設から7年後（1962年）、与儀中学校から校名変更した神原中学校へ185名、翌年には壺川中学校から校名変更した古蔵中学校に460名の生徒が移動している。さらに1965年、後に石田中になる識名中学校に分離、1985年には、仲井真中学校の開校で真地、上間、仲井真、国場の一部が移動することになる。寄宮中学校は開校から4校に分離し校区は、大きく変わってきたことになる。

また、校名について『寄宮中学校50周年記念誌』（2005）に「寄宮中学校開校のころとその後」と題して次のような記載がある。

「学校の呼称について問題が起こった。地元の有志の方々は、地名を大切に^{よせ}する意味で寄宮^{みや}を主張し、先生方は寄せ集めではなく、心から寄り集まって作る学校という意味から寄宮^{よしみや}がいいのではと互いにゆずらなかった。そこで双方の代表者の話し合いがもたれ、長い討議の末に宮里孝助先生が『寄^ゆしりやあらん心から寄^ゆりて今宵やうち揃て語る嬉しさや』と琉歌を朗詠なされると、一座の雰囲気も和み『うん、それがいい』と賛同の声が多く上がり、めでたく寄宮^{よしみや}と呼ぶことに決まった。」（『寄宮中学校50周年記念誌』94頁）

「寄宮」の地名について『国場誌』（2003）には、「1948年、寄宮が国場の寄増原（ユシマス原）、与議の宮城原の頭文字をとって、分字独立する。昭和55年に正式分字」（『国場誌』430頁）と記載されている。なお、その間の寄宮地域活動については記されていない。

2-4. 上間地区について

『上間誌』（2009）には、「石田中学校開校」、「上間小学校開校」の記述がある。上間区域は高台に位置した地理的条件から真和志間切（後に真和志村となる）上間番所が置かれていた。1879年廃藩置県後、その跡地に真和志小学校が設立されている。

戦後、上間地域の児童生徒は真和志小学校、真和志中学校に通学していた。人口の増加に伴い真和志中学校が寄宮中学校に分離し、さらに1965年石田中学校が寄宮中学校から分離開校となり、上間地域は3度の中学校の校区変更を体験した。

また、1977年上間小学校の開校により、小学校の通学域も真和志小学校、識名小学校に3度変更となっている。上間地域は通学路の確保に力を注いだ記録も見られる。

上間自治会は、「識名小学校の分離校新設に際して、9年間凍結されていた那覇市の寄宮地区区画整理事業対象の長田地区への設置と校名に上間をつけることに積極的であった。」（『上間誌』562頁）とある。地域がひとつになる願いは特に上間地域に強く、校名に地域の名を込めた上間小学校が開校し、現在に至る。

2-5. 学園都市構想

『国場誌』（2003）の中に「第3章 教育文化」の中に「6 学園都市」の項目がある。この項目には、国場地域にある私立校4校の沿革及び国場地域との連携協力について寄稿の形で掲載されている。

寄稿した学校は「沖縄大学」「沖縄尚学高等学校・中学校」「沖縄女子短期大学」「沖縄女子短期大学附属高等学校」である。この4校は、校名改称等があり、開校時と異なるが、国場出身の嘉数昇、律子夫妻により戦後初の私立高等学校、大学、女子高等教育機関として創立された学校であり、その所在地は国場である。

学校の他、「地域参加型の児童育成の要素を多く持っている。」として「国場児童館」を加え、国場地域を「学園都市」と紹介している。

1999年、寄宮中学校区で取り組まれた文科省指定の道徳実践活動地区のフォーラムにて、幼稚園から大学までである同区を「学園都市」と表現し、教育機関と地域が連携した地域作りを提言した。大学の所在地である国場地域には、その提言にある「学園都市」の意識があったとも思える。

2-6. 国場自治会と幼稚園

『国場誌』（2003）には「五、国場幼稚園のあゆみ」として、「国場自治会青年会立国場幼稚園」で開始した国場幼稚園の経緯が記されている。

国場自治会青年会は、1951年当初同年代対象の講習会を開催していたが、「同年代の人達の教育は難しい事を実感。次の時代を担う子どもたちを育てようと幼稚園の設立を計画した。」（『国場誌』323頁）。青年会は、早朝作業で費用を作り、国場青年会立国場幼稚園を開

園した。その後、自治会立として40年余、1,402名の園児を送り出している。

小学校附属幼稚園設置に始まり、小学校内設置において現在に至るまで、幼稚園開園の中心として関わった玉城幸治氏は「小学校、中学校に入ると国場でも校区が分散される。だから幼稚園は、国場人としての共同体意識を共有できた原点であるといっても過言ではないだろう。そこで育てられた地域共同体意識というものが自治会を支える大きなバックボーンとなっていると私は信じている。」(前掲書217頁)と述べている。

国場自治会立幼稚園は2001年に閉園となる。幼児教育の意義が「地域共同体意識の育成」という視点はその後、どのように引き継がれたのか、追跡したいところである。

2-7. 子ども・若者が輝く地域づくりについて

『平成24年度那覇市の教育』(2013)に「地域と連携して青少年の健全育成を図る」重点課題の取り組みの柱、方針として、「4 地域におけるさまざまな団体と連携し、青少年を育むための機会や環境づくり、体験活動の場、情報の提供・充実に努める。」「公民館などの社会教育機関、NPOなどの市民団体との連携、地域の人材を活かした青少年対象の学習プログラムの企画・実践で、地域づくり活動の充実をはかると共に、多世代、多様な人々との交流から得られる社会性の習得を目指す。那覇市青少年健全育成市民会議と連携し、青少年旗頭事業や若者の人材育成事業に取り組んでいく。」(『平成24年度那覇市の教育』79頁)と掲げている。青少年の育成のキーワードは、地域との連携である。

学校教育と地域での社会教育への移行を子ども達に見えるようにすることが課題と考える。

また、2006年5月に、沖縄県社会教育委員の会議が、『「地域の子は地域で育てる」ための具体的な施策の推進を図る～子ども・若者が輝く地域づくりを中心に～』という提言書を出した。その13頁から19頁に「地域教育力再生プラン」の他「ゆいまーる居場所づくりプラン」があり、目指す項目に「④地域社会の学習資源を総合的に統合し青少年が参画し、協働できるネットワークの構築」がある。特に、その推進を強調し「ゆいまーる連絡協議会」の設置を提言している。

これらの提言は、前掲の寄宮中校区における道徳実践活動地区フォーラムでの提言と共通すると考える。「学園都市をめざす地域」について、「多世代、多様な人々との交流と学び場の地域」の視点で再検討し、地域の大学をはじめとした教育機関の連携、特に大学生による地域づくりとして、具体的な提案ができないだろうかと考える。

3. 那覇市および寄宮地域における子どもたちへの取り組み

3-1. 「那覇市子ども会」について

那覇市子ども会育成連絡協議会(以下、市子連)は、1978年に結成され、現在も那覇市泉崎の開南小学校内の事務局が中心となって活動を行っている。

活動内容は、地域クリーン作戦などのボランティア活動、インターンシップなどの職場体

験、児童館での遊びやキャンプ、太鼓やエイサーでの各種まつりへの参加である。また、ジュニアリーダーの養成活動としてジュニアリーダークラブを組織し、県内外において交流や研修活動などを行っている。

現在の会員数は約2,500名であり、ジュニアリーダーは15名が活動している。活動費是那覇市教育委員会青少年育成課からの補助金を受けている。会則には「教育隣組をもって単位子ども会を構成していく」という教育的活動が目的とされているが、現在、教育隣組はほとんど存在していない。「市子連」に加入している団体数・子ども数も現在は横ばいの状況であり、その名称や活動もあまり知られてはいない。地域での子どもの活動も同様である。

この章では那覇市の子どもの会の変遷、寄宮地域での子どもに関わる活動、寄宮中学校区で取り組まれた活動をみていく。

3-2. 那覇市子ども会の変遷 記念誌より

2014年で、38年を迎える子ども会の活動内容や活動目的も時代とともに少しずつ変化しており、その変遷を「那覇市子ども会」の5、10、20、30周年の各記念誌から確認する。

まず、1983年の5周年には、加入団体は52団体、2,078名の加入者があった。そして、「市子連」の活動組織として那覇JL（ジュニアリーダー）が中・高校生を中心に組織された。結成当初、子どもたちを取り巻く生活環境の著しい変化が懸念され、子どもたちの健全育成に向けての「家庭・学校・地域社会」の役割を明確にし、地域を繋げる活動の場として「子ども会」が組織されていった。

「子ども会活動をしている子ども達に非行少年、少女は居ません。どうか育成者の皆様、これからの那覇市、沖縄県を背負って立つ青少年のために子ども会育成に頑張ろうではありませんか。」（那覇市子連 宮里）（『那覇市子ども会5周年記念誌』8頁）

趣旨においても子ども達の人格形成と生活態度、地域と共に次世代育成に取り組むことが明記されている。

10周年（1988年）になると、青少年の深夜徘徊が社会問題となっており、健全育成を目的とした教育的役割として「子ども会」が位置づけられている。しかし同時に「都市化する中、子どもが社会で生きていく人間として育てていくために、豊かな心、心の通じ合う地域づくり、子ども会を育てることは、地域に心の豊かさを取り戻すことであり、人間らしさを回復すること」（那覇市教育委員会教育長 山田義良）（『那覇市子ども会10周年記念誌』18頁）とあるように「地域づくり」の考えも見られるようになる。

さらに生活習慣の確立のための活動も活発に行われ、「子どもの生活技術調査」というユニークな実技テストを実施している。

実施内容は、「肥後守で鉛筆を削る」「ノコギリで板を切る」「ボタンをかける」「箸を使う」「生卵を割る」等であり、小学校1年生から6年生まで241名を対象に行った。

20周年では、「子ども一人一人が自己を主張し、その存在する意義と喜びを見いだすこと

ができるように考え行動し支える人達を育てることにあり、その場づくりを提供すること。」(那覇市子ども会育成連絡協議会会長 山根春代) (『創立20周年記念誌』12頁) とある。健全育成の場とともに、人間や自然とつきあう直接体験の場としての役割も考えられるようになり、目的も多様化している。

30周年(2007年)には、70の単位子ども会が組織されているが、単位子ども会の活動より、ジュニアリーダーを中心とした活動となっている。

記念誌では、「那覇市の子ども会を語ろう」をテーマに座談会を開催している。子ども会の活動が減っている現状を踏まえ、「少子化、IT社会、部活、塾、保護者の意識変化」という課題が挙げられた。社会が多様化している中、次世代を担う子どもを育成する場として地域の役割を再確認している。

そして、那覇市全体のネットワーク、全地域を網羅する「市子連」の組織作り、地域全体での子どもたちの育成を目指すことになる。「なは教育の日」の設定や市内全中学校区での旗頭の結成、「やる気・元気旗頭フェスタin那覇」の開催などがなされ、「市子連」も参加している。

3-3. 寄宮地域における放課後子ども教室

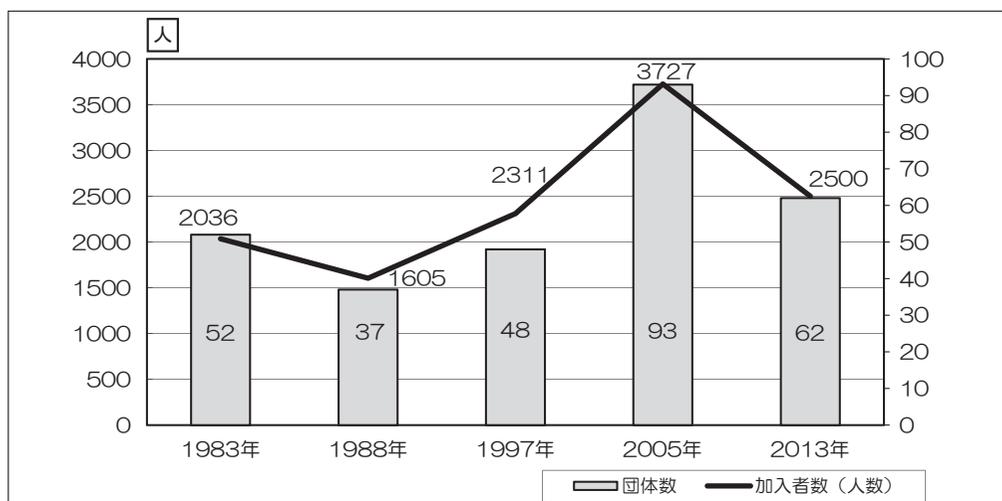
「放課後子ども教室」は「放課後子どもプラン」の一事業として行われ、学校の施設を開放し、放課後の子どもたちの居場所として地域の指導者や保護者が中心に取り組みされている。子ども会を単位として開始された教室もあり、那覇市では小学校、公民館、児童館、自治会にて40カ所、100以上の教室が開催されている。

この「放課後子ども教室」は、寄宮地域においては真和志小学校が盛んである。余裕教室を利用し、「にこにこルーム」という専用の部屋を設け、地域の民生・児童委員の方々による週4回の踊りや手芸の指導や、体育館でのキンボール指導が行われている。

子どもたちは授業が終わると「にこにこルーム」に来て宿題や活動を行う。同じ小学校内の幼稚園の空き教室には学童もあり、学童に通いながら「放課後子ども教室」に来て活動する児童もいる。学童、塾、スポーツ教室にも行っておらず、親が仕事で日中家にいない児童にとっては「放課後子ども教室」が放課後の大切な居場所になっている。また、子どもや保護者が地域と関わりが持てる唯一の場所となっているケースもある。

その他、上間小学校ではエイサーや太鼓の教室を、与儀小学校では保護者の協力で夜間に体育館でエイサーが行われている。

核家族化や共働き世帯が増加する中、「放課後子ども教室」は、塾やスポーツ教室以外の放課後の子どもの居場所として機能し、地域と関わり合える場になっている。



那覇市単位子ども会の団体数と加入者数の変化
 (出典『那覇市子ども会5周年記念誌』『同10周年記念誌』『同20周年記念誌』『同30周年記念誌』)



真和志小学校放課後子ども教室の取り組み

3-4. 上間子ども会の取り組み

上間地域は、学校内での子ども会や、地域や自治会などによる子ども会などが存在し、活動内容もそれぞれである。「市子連」に加入していない子ども会や、地区によっては子ども会が存在しなかったり、子ども会としての活動が休止している所もある。

上間子ども会は上間自治会により1981年に発足している。小学校1～6年生を中心に活動し、活動内容は、夏休みの朝のラジオ体操、自治会行事への参加、上間小学校PTA活動への参加などで、地域の子どもの安全にも関心が高い。

朝の立哨（交通指導）にも早くから取り組み、行政へ危険場所へのフェンス設置を要望し実現させている。また、リサイクル、環境整備を目的に空き瓶やアルミ缶を回収し、活動資金としたこともある。定例会を開き、意見を出し合い、クリスマスパーティーや新入生、卒業生の歓送迎会、映写会も開催した。

1994年からは公民館前広場でもちつき大会を開催している。上間小学校長も参加し正月を地域の皆で祝うなど、健全育成にも取り組んでいる。発足した年には学事奨励会に代わるものとして「子ども会まつり」も開催していた。

しかし、活動の中心となる方がいなくなり、現在は休止状況である。朝のラジオ体操等は自治会が中心となって行っているが、かつてのような活動は行っていない。

このような状況は上間子ども会だけでなく、都市部の地域と子どもを考える際の課題として共通するものである。

3-5. 寄宮中学校の取り組み①

1987、1988年の研究実践（「学校教育目標の達成をめざした生徒指導のありかた」）

寄宮中校では1987年度、1988年度（昭和62年度、63年度）に文部省指定生徒指導総合推進校、沖縄県教育委員会指定・那覇市立教育研究所研究協力校として、「学校教育目標の達成をめざした生徒指導のありかた」というテーマで研究を行っている。副題は「自ら考え、進んで実践する生徒の育成」であり、教科指導、道徳指導、学級会活動、地域活動、生徒指導の部会に分かれてそれぞれの研究・実践を行っている。

自ら考え、進んで実践する生徒の育成に向けて地域活動を学校主体となって取り組み、中学校において小学校と合同で教育隣組を結成している。

研究資料『学校教育目標の達成をめざした生徒指導のありかた』（1989）によると真和志小学校区の子ども会は23、与儀小学校区では16、上間小学校区では7つ結成されている。その子ども会を中心に環境クリーン作戦を実践したり、学習生活をより良くする為のアンケートも実施している。

「家庭学習」に関して子どもたちに「やる気」が起こるときや起こらないとき、学習時間、学習塾に行っているかを調査し、調査を「学力向上対策」に繋げ、地域教育懇談会において父母との話し合いを持っている。

家庭学習の不足を補うために問題集を作成したり、夏休みにはエアコンを完備した教室を開放し教師が教科指導を行うなどしている。このような取り組みから生徒会も徐々に変化し「生活実態アンケート」を全校生徒に実施するなど、「自分たちがいま何をしなければならぬのか」自ら考え、進んで実践するという目標が実現しつつあったようである。

3-6. 寄宮中学校の取り組み②

1998～2000年の研究実践（「道徳的实践活動地区（ハートフル地区）」の指定）

寄宮中学校区では、1998～2000年度（平成10～12年度）の3年間にわたって文部省と那覇市教育委員会から、道徳的实践活動地区（ハートフル地区）の指定を受け、研究実践を行っている。寄宮中学校区にある真和志幼稚園、真和志小学校、寄宮中学校、そして学校道徳推進委員会を立ち上げ、共通主題を「豊かな心でたくましく生きる力の育成」とし、学校、家庭、地域の連携のもとに豊かな体験活動を通して道徳性の育成を図ることを目的とした。

これは当時発生した社会的重大な事件を背景に、豊かな人間性の喪失が体験の喪失、地域社会の変容から生じているという危惧から取り組まれたものである。「豊かな心」や「生き

る力」を学校、家庭、地域での体験により育成することをねらいとした。

「道徳的実践活動を中核とした事業の推進により、幼児児童生徒に心豊かにたくましく生きる力を育成する」「幼児児童生徒、地域社会との交流を積極的に図ることにより、豊かな社会性や共によりよく生きていこうとする態度を育成する」（『平成10、11、12年度文部省指定道徳的実践活動地区〈ハートフル地区〉推進研究報告書』1、2頁）と研究目標を掲げている。

この研究報告書によると、1年目には、研究体制の確立、研究計画、実践活動の決定を行い、「学校道徳推進委員会」を設置している。2年目には各学校や幼小中連携による道徳的実践活動を展開した。そして、3年目には、研究のまとめと発表会を開催した。

それぞれの実践の中で、特に注目するのは「学校道徳推進委員会」の研究実践である。学校道徳推進委員会による研究副題は「子どもたちに豊かなふるさとを」であり、その役割は、ハートフル地区の道徳的実践活動および地域の活性化のための提言・支援である。

実践項目は、①ハートフル地区の学校への支援、②地域の活性化のための提言及び支援、③各種関連機関との連携の促進、である。

実践の具体的内容として、①ハートフル地区の幼・小・中の道徳的実践活動の支援、②ハートフル地区の学習支援ボランティアの会の設置支援、③地域づくりフォーラムの実施による活性化への提言、④クリーン・グリーン活動の実施、⑤まつり実施による地域活性化を掲げている。寄宮中学校区が、21世紀の主人公である子どもたちにとって、より豊かですみよい地域となり、より望ましい成長を促すことができるような「豊かなふるさとづくり」をめざし地域づくりに取り組んだ。

学校道徳推進委員会は、1999年7月3日に実践項目の一つである「地域づくりフォーラム」を真和志農協本所の大ホールにて開催している。

「～子どもたちに豊かなふるさとを～」のテーマのもと、幼小中の保護者、子供会関係者、教育関係者、青年会、婦人会、老人会、通り会などを参加対象者とし、保護者や青年、壮年の代表、教員、行政の代表、子ども会や生徒代表が発表を行い、300名もの参加者があった。フォーラムでは地域づくりへの次の提言がなされている。

提案1、クリーンな地域（まち）

ノーボイでクリーンなまちに
ゴミの分別と収集日を守るクリーンなまちに

提案2、ハートフルな地域（まち）

青少年に愛の一声でハートフルなまちに
親子読書でハートフルなまちに
花とふれあい広場のあるハートフルなまちに

提案3、ボランティアネットワークのある地域（まち）

子ども達の学習支援のために地域行事、子ども会等の支援・活性化のために

提案4、学園都市文化都市をめざす地域（まち）

保・幼・小・中・高・大学、地域の連携による特色ある文化都市の創造

この提言の実現に向けて学校道徳推進委員会はその後さまざまな実践を行っている。その一つとして、提言3で掲げた地域行事、「寄宮まつり」を2000年11月に開催している。

3-7. 「寄宮まつり」の取り組み

当時、学校道徳推進委員会の副委員長であり、「寄宮まつり」の実行委員長を務めた島袋恵子さんに話を伺うことができた。

寄宮中学校区は戦後の急激な人口増加に伴って拡大した比較的新しい地域であり、地域の中心となる自治会も存在しなかったという。島袋さんも他地域から寄宮へ移り、自身のふるさととは他地域にあるが、寄宮地域で育った子どもは、今住んでいる寄宮地区がふるさとであり、「今の環境で大人の私たちに何ができるかを考え実行していかなければならない」という思いを強く持っていた。

当時、那覇市教育委員会から発行された『ハートフル広報』（1998）に島袋さんの熱い思いが寄せられている。

「まず地域の子どもから大先輩の方まで一同にし、共に地域の街づくりを考えていく機会として、街づくりフォーラムを実施し、地域子供運動会や、盆踊り大会等を地域・中学校・近郊の大学それらを網羅して、地域行事として拡大できたら、この子どもらのふるさととは今まで育ってきたこの地域であり、この取り組みがふるさと作りのきっかけになればという思いも過言ではないと思います。」

フォーラムに参加し、提言を行い実践した人々は「ふるさと寄宮づくり」を目指し、その思いは、「寄宮まつり」から「真和志まつり」に受け継がれ14年あまりも続いてきた。

毎年、寄宮地区で開催されている「真和志まつり」は、第6回目までは寄宮まつり実行委員会によって実施されていた。

実行委員長を島袋さんとし、実行委員には、学校関係者、青年会、婦人会、青少協等、地域の人々30名が集まり取り組んでいる。共催には寄宮十字路通り会、真和志まちづくり委員会、寄宮中学校区道徳推進委員会が入り、地域に関わる様々な関係者の「豊かなふるさとづくり」が行われていた。寄宮地区に暮らすさまざまな人々が寄り集まり、思いを一つにして自分たちのふるさとづくりを行っていったのである。

「寄宮まつり」以外のフォーラムの提言について、提言1、「クリーンなまちの実現」は、1999年11月に「クリーングリーン大作戦」と称し、寄宮十字路周辺のごみ拾いとプランターの苗植えを実施している。病院や銀行、商店の支援を受け、60名あまりの参加者があった。提言3、「ボランティアネットワークのあるまち」については学習支援ボランティアを募り、小中学校で地域の方による読み聞かせや、裁縫、三線、スポーツ（ストレッチ）が行われた。

フォーラムの提言から様々な活動が行われたのである。

3-8. 学園都市文化都市構想についてのインタビュー

提言から様々な活動が実現したのだが、提言4、「学園都市文化都市をめざす地域（まち）」については具体的に実現されていない。当時、ハートフル研究推進を指定する那覇市教育委員会の担当指導主事であった盛島明秀さんに話を伺った。

「文部省からの地域指定を受けて、この地域の強みを生かして何かやっていきたいという思いがあり、その中からまつりや、街を美しく、緑をふやしたいという声が出てきた。

まつりもクリーンなまちも、読み聞かせボランティアも実現できたが、学園都市構想だけは形として見えてこなかった。沖大にも足を運び、話し合いを持ったが当時の大学は強い思いがあまりなく、具体的に動き出すことがなかった。継続性・具体性がなかった。

こういうことをやって、こういうことを達成しよう、ということがなかったことが実現しなかった一つの要因と考えられる」

「寄宮から一番近い沖大との連携には強い思いがあったので残念だった。しかし、今ならできると思う。中学3年生が大学の講義を聞いたり、中学校の学校行事に学生が参加するなど、もっと大学が身近になるようなことができるのではないだろうか。今なら十分可能性があると思う。」と語ってくれた。

学校道徳推進委員会副委員長の島袋恵子さんも「ハートフル地区として指定を受け、学校を中心にスタートしたが、地域でフォーラムを実施し、地域の活動として継続してきたことが今につながっている。まつりも読み聞かせも放課後子ども教室のようなボランティアもフォーラムに参加した方々、まつり実行委員や通り会の人々がそのまま引き継いでいる。」

「ハートフル地区の研究を通したフォーラムがなければ今の姿はできていなかった。学校だけでなく、地域で委員会をつくったことが繋がっている。自分もバトンを渡す人を見つけておけば良かった。」と語ってくれた。

「寄宮まつり」が実現し地域づくりが進んだことと中心的コーディネーターとしての役割を引き継げなかったとの思いを持っている。

島袋さんに、学園都市構想の実現に向けて大学に求めるものを伺った。

「中学生は本来なら大学生と気持ちが近い。年齢も近い。機会があれば、何か形があれば繋がりができる。そのためにはしかけが必要。何をどんなふうにしかけるか、地域でのイベント、大学生のイベントに寄宮中の子どもを巻き込むようなものが必要。楽しくないと、続かない。」

「部活の支援でもいい。スポーツだけでなく、文化面も。授業に支援できたらいい。部活に入っていない子どもたちこそ支援が必要。きっかけがないといけない。自分もまだまだやりたいことがある。今、やっと仕事（那覇市育英会）を退任したので、中学生と何かやりたいと考えている。」と語って下さった。

これまでに寄宮地域で行われた取り組みを確認し、フォーラムの提言が大きな役割を果たしたことが分かった。しかし、学園都市構想については課題として残っていることも確認することができた。これまでの取り組みや島袋さん、盛島さんのお話は今後の地域づくりにおいて重要な意味を持つものである。

4. アンケート結果

4-1. 調査の対象と質問内容

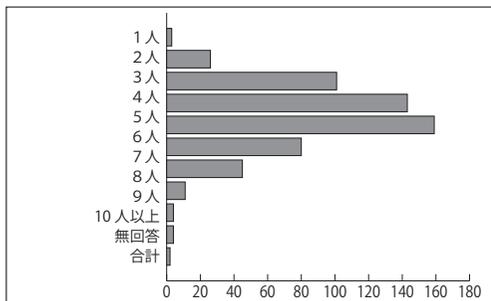
以下が、寄宮中学校でのアンケートの質問項目である。問1～5は選択式、問6～15は記述式である。記述式の回答については、記述内容によって項目別に集計した。この章ではアンケートの回答結果を中心に寄宮地域の子どもたちの状況を考察する。

質問項目	質問の意図
問1 学校と学年、性別を教えてください	子どもの属性、所属の把握
問2 誰と一緒に住んでいますか 家族みんなで何人ですか（自分もあわせて）	子どもたちの家庭状況の把握
問3 夕ごはんは誰と食べることが多いですか	子どもたちの食生活の把握
問4 朝ごはんは食べていますか	
問5 学校が終わったら何をすることが多いですか	放課後の生活の把握
問6 ほっとできて安心できる場所はありますか	子どもたちの居場所の把握
問7 何でもいいから、これが得意だなんて思えることがありますか	子どもたちの自己肯定感の把握
問8 自分のことを大切に思ってくれる人がいますか	子どもたちの人間関係、大人との付き合いの把握
問9 好きなおとながまわりにいますか	
問10 これはおとなに伝えたい！！って思うこと、何でも書いてください	子どもたちの大人への眼差し、大人の様子子の把握
問11 那覇市寄宮地区（おうちの近く）は住んでいて、いいところだと思いますか	子どもたちが自分の暮らす地域をどのように捉えているかの把握
問12 どんな那覇市寄宮地区（おうちの近く）になったらいいなあって思っていますか	子どもたちが自分の暮らす地域の未来をどのように捉えているかの把握
問13 学校で好きなこととしていいよって言われたら、何をしたいですか	子どもたちの学校での生活や欲求の把握
問14 休みの日に、やりたいことができるとしたら、何をしたいですか	子どもたちが本当にやりたいことの把握
問15 誰かに何かをしてあげたいと思ったこと、ありますか	子どもたちの貢献意欲の把握

4-2. 世帯状況

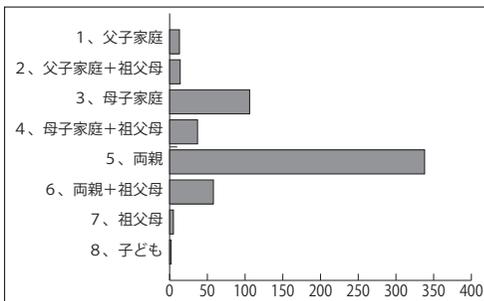
問2 家族人数 みんなで何人？（自分もあわせて）

	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人以上	無回答	合計
合計	3	26	101	143	159	80	45	11	4	4	2	578
	0.5%	4.5%	17.5%	24.7%	27.5%	13.8%	7.8%	1.9%	0.7%	0.7%	0.3%	



家族構成

	1. 父子家庭	2. 父子家庭+祖父母	3. 母子家庭	4. 母子家庭+祖父母	5. 両親	6. 両親+祖父母	7. 祖父母	8. 子ども	合計
合計	13	14	106	37	338	58	5	2	573
	2.3%	2.4%	18.5%	6.5%	59.0%	10.1%	0.9%	0.3%	



世帯の人数は5人（27.5%）、4人（24.7%）、3人（17.5%）が多い。家族構成では、両親と子どもの核家族338人（59.0%）、母子家庭106人（18.5%）、両親と祖父母の三世家庭58人（10.1%）であった。

母子家庭、父子家庭を合わせたひとり親家庭は119人（20.8%）であり、那覇市（2010）の9.6%ⁱ、沖縄県（2005）の10.3%ⁱⁱの約2倍である。また、ひとり親家庭に父子家庭と祖父母、母子家庭と祖父母を合わせた世帯は、170人（29.7%）となり、30%近くになる。

3～5人の世帯、核家族世帯、ひとり親世帯が多いことが分かる。

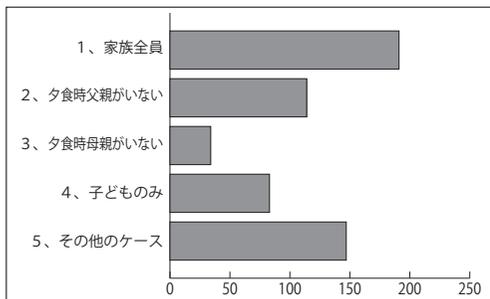
以下の奈良間他（2014）の指摘があるように、子どもの実態把握において家族・世帯については基本的事項として抑えるものである。

「子どもをもつ家族の機能は、養育・愛情・社会化がある。生命の維持に必要な衣服・食事・住居を提供し、日々の生活の世話と生活に必要な経済的支援をする。愛情は、家族から子どもにまた子どもから家族にと相互の愛情によって絆を深めたり情緒の安定を得る。この愛情は、家族以外のものでは与えることの出来ない特別なものである。社会化は、社会の一員としての生活習慣や社会性特に家族と社会との関わりを通個人としての役割・責任や社会の仕組みを教えていく。」（『系統看護学講座専門分野Ⅱ小児看護学1』154頁）

4-3. 食事の状況

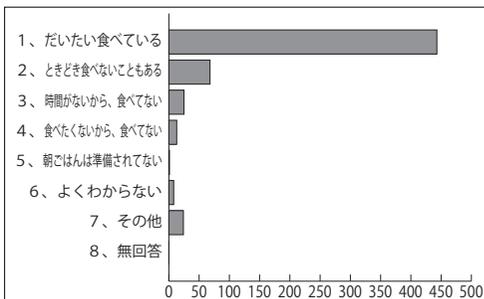
問3 夕ごはん時の家族構成

	1、家族全員	2、夕食時父親がいない	3、夕食時母親がいない	4、子どものみ	5、その他のケース	合計
合計	191	114	34	83	147	569
	33.6%	20.0%	6.0%	14.6%	25.8%	



問4 朝ごはんは食べていますか？

	1、だいたい食べている	2、ときどき食べないこともある	3、時間がないから、食べてない	4、食べたくないから、食べてない	5、朝ごはんは準備されてない	6、よくわからない	7、その他	8、無回答	合計
合計	443	68	25	13	1	8	24	0	582
	76.1%	11.7%	4.3%	2.2%	0.2%	1.4%	4.1%	0.0%	



夕食時の家族構成において家族全員が揃う家庭は191人（33.6%）であり、多くの家庭が全員揃わずに食事をしており、日常生活のなかで家族全員が揃う機会はあまり多くはないのではないかと考えられる。子どものみで夕食を済ませるケースも83人（14.6%）ある。

朝ごはんは、443人（76.1%）がだいたい食べているが、時々食べない、など食べないことのある子どもは107人（18.4%）であった。食事自体が安定していない子どもや食事を共にするメンバーが安定していない子どもが一定数いると考えられる。

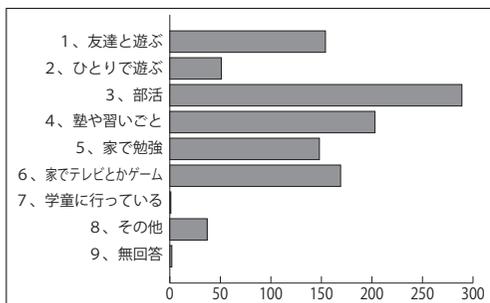
食事は単に“栄養補給の目的”のみではなく、人間関係をつくる基本となる。特に家族で食事することは団欒の場としてまた家族間の関係性づくりに重要であると考えられる。「子どものみ」「その他のケース」も注目することである。

また、内閣府の調査「食育に関する意識調査」(2013)によると、暮らし向きにゆとりがある世帯ほど、家族で食事をする回数が多く、朝食を毎日摂る傾向がある。一方で、暮らし向きにゆとりがない世帯ほど、家族が揃わずに食事をする傾向や朝食を摂らない傾向があるという。

4-4. 生活環境

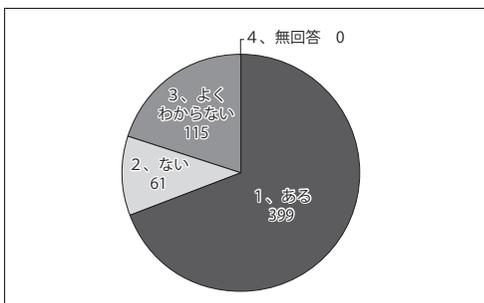
問5 学校が終わったら、何をしている事が多いですか？

	1、友達と遊ぶ	2、ひとりで遊ぶ	3、部活	4、塾や習いごと	5、家で勉強	6、家でテレビとかゲーム	7、学童に行っている	8、その他	9、無回答	合計
合計	154	51	289	203	148	169	1	37	2	1,054
	14.6%	4.8%	27.4%	19.3%	14%	16%	0.1%	3.5%	0.2%	



問6 ほっとできて、安心していられるところがありますか？

	1、ある	2、ない	3、よくわからない	4、無回答	合計
合計	399	61	115	0	575
	69.4%	10.6%	20.0%	0.0%	



それはどこですか？

1	自宅（自室、風呂、トイレ、布団の中、居間）	343人（70.4%）
2	学校	49人（10.1%）
3	友達の家、友達といる時	28人（5.7%）
4	親戚の家	19人（3.9%）
5	塾、習い事	13人（2.7%）
6	自然	10人（2.1%）
	その他	25人（5.1%）
	合計	487人（100.0%）

放課後の過ごし方（問5）については、「部活」289人（27.4%）、「塾や習いごと」203人（19.3%）、「家でテレビとかゲーム」169人（16%）であった。学校が終わったあと、子どもたちは主に部活、塾・習い事、家で過ごしており、塾・習い事以外に地域で過ごすことが少ないと考えられる。

また、「ほっとできて安心できる場所」（問6）、つまり子どもたちの居場所については、399人（69.4%）が「ある」と答えた。具体的な場所としては、「自宅」343人（70.4%）、「学校」49人（10.1%）が挙げられた。

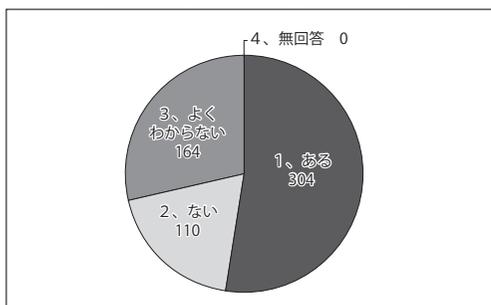
ほっとできる場所は自宅が大きな割合を占め、その中でも自室、トイレ、風呂、布団の中等の一人でいられる場所の記述が多く、一人で居られる場所が居場所として認識されていることが読み取れた。学校や地域が居場所としての受け皿になっていないこととともに、複数人であるときにほっとできる経験があまりないことも分かる。

また、トイレや風呂は、排せつや入浴の生理的欲求を充足する場所として使用されるが、その場所が「ほっとする場」と回答していることにも注目する。

4-5. 自己肯定感

問7 何でもいいから、これが得意だなって、思えることがありますか？

	1、ある	2、ない	3、よくわからない	4、無回答	合計
合計	304	110	164	0	578
	52.6%	19.0%	28.4%	0.0%	



それは、何ですか？

1	スポーツ	182人（48.9%）
2	趣味遊び	65人（17.5%）
3	音楽	41人（11.0%）
4	勉強	40人（10.8%）
5	習い事	7人（1.9%）
	その他	37人（9.9%）
	合計	372人（100.0%）

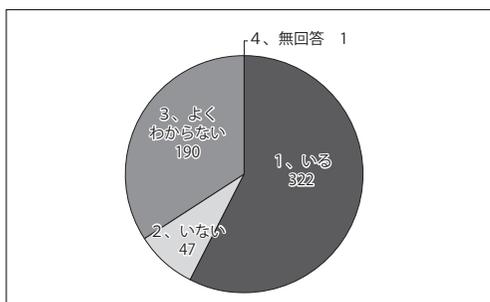
「何でもいいからこれが得意だなって思えることがありますか」（問7）という子どもたちの自己肯定感を把握する質問については、「ある」が304人（52.6%）、「ない」が110人（19%）、「よくわからない」が164人（28.4%）であった。「よくわからない」の回答が多かった。得意なものの記述回答は「スポーツ」182人（48.9%）、「勉強」40人（10.8%）であり、部活に所属するなど、学校に活躍の場がある子どもは、自己肯定感を持つ機会があるが、学校で活躍

の場を見つけれられない子どもは、自己肯定感を持ちにくいと考えられる。学校以外に活躍の場を見出すことで「よくわからない」の回答が減ると考える。

4-6. 子どもたちの人間関係

問8 自分のことを、大切に思ってくれる人がいますか？

	1、いる	2、いない	3、よくわからない	4、無回答	合計
合計	322	47	190	1	560
	57.5%	8.4%	33.9%	0.2%	

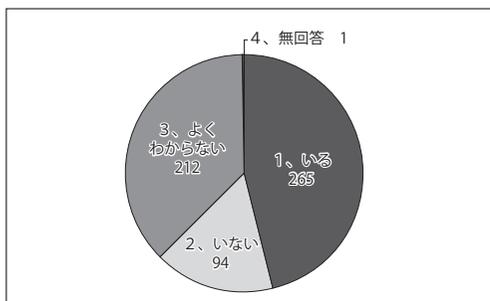


それは誰ですか？

1 家族・親戚	362人 (76.7%)
2 友達	92人 (19.5%)
3 先生	4人 (0.8%)
4 身近な人、地域の大人	6人 (1.3%)
5 部活のコーチ、塾の先生	0人 (0.0%)
その他	8人 (1.7%)
合計	472人 (100.0%)

問9 好きな大人が、まわりにいますか？

	1、いる	2、いない	3、よくわからない	4、無回答	合計
合計	265	94	212	1	572
	46.3%	16.4%	37.1%	0.2%	



それは誰ですか？

1 家族・親戚	362人 (76.7%)
2 友達	92人 (19.5%)
3 先生	4人 (0.8%)
4 身近な人、地域の大人	6人 (1.3%)
5 部活のコーチ、塾の先生	0人 (0.0%)
その他	8人 (1.7%)
合計	472人 (100.0%)

問10 これはおとなに伝えたい！！って思うこと、何でも書いてください

1 自分たちへの大人の振り舞いや態度	203人 (50.0%)
2 大人の普段の振る舞いやマナー	39人 (9.6%)
3 飲酒、喫煙をやめてほしい	26人 (6.4%)
4 住環境の改善、地域づくり	14人 (3.4%)
5 世の中のこと	14人 (3.4%)
6 学校でのこと、勉強のこと	13人 (3.2%)
7 大人への感謝やお礼	12人 (3.0%)
その他	85人 (20.9%)
合計	406人 (100.0%)

「自分のことを大切に思ってくれる人がいますか」（問8）という子どもたちの人間関係を尋ねる質問には、「いる」が322人（57.5%）、「いない」が47人（8.4%）、「よく分からない」が190人（33.9%）であった。「いる」と答えた子どもの記述回答では「家族・親戚」362人（76.7%）、友達92人（19.5%）であった。

子どもたちの人間関係において、家族・親戚、友達が大きな割合を占めており、先生や地域の人を挙げた回答が非常に少なく、信頼できる人間関係の偏りが見られた。

「これはおとなに伝えたい！！って思うこと、何でも書いてください」（問10）については405人が記述回答し「自分たちへの大人の振る舞いや態度」に関するものが203人（50.0%）と最も多く、「大人の普段の振る舞いやマナー」に関するもの39人（9.6%）、「喫煙、飲酒をやめてほしい」26人（6.4%）であった。「自分たちへの大人の振る舞いや態度」については、女子の記述回答が多かった。大人への厳しい指摘と自分たちを一人前に見てほしいという記

述が多かった。以下、記述回答を紹介する。

- 「なんでも大人が正しいと思うのはやめて欲しい」(女子)
- 「家族のために頑張ってくれているのはわかるけど、もうちょっと構って欲しい」(女子)
- 「ストレスを子どもにおしつけないで」(女子)
- 「子ども扱いしないで欲しい」(男子)
- 「子供の心配は分かるが、子供は、ちゃんと考えているから大丈夫です」(男子)
- 「勉強が全てではない！ もっと遊ばせろ！！」(男子)

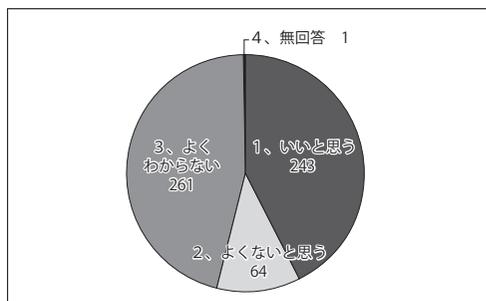
しかし、「好きな大人がまわりにいますか」(問9)では、好きな大人がいる、と答えた子どもは、265人(46.3%)、よくわからない、は212人(37.1%)であった。そのうち356人(81.8%)が家族・親戚を挙げ、43人(9.9%)が先生を挙げており、大人のことが嫌いなわけではないが、家族・親戚が大部分を占めている。地域の人を挙げる記述はごく少数であった。

大人もストレスを抱え、子どもと関わる時間や余裕がないことも推察される。

4-7. 地域の把握

問11 那覇市寄宮地区(おうちの近く)は住んでいて、いいところだと思いますか？

	1、いいと思う	2、よくないと思う	3、よくわからない	4、無回答	合計
合計	243	64	261	1	569
	42.7%	11.2%	45.9%	0.2%	



(寄宮地域が) いいと思う、と答えたみんなに聞きます。それは、なぜですか？

1 遊び場やショッピングセンター	88人 (30.0%)
2 地域の人との触れ合い、挨拶がある	69人 (23.5%)
3 暮らしやすい	34人 (11.6%)
4 安全・安心な街	27人 (9.2%)
5 学校が近い	18人 (6.1%)
6 静か・落ち着く	16人 (5.5%)
7 きれいな街、自然	14人 (4.8%)
8 友達に関すること	12人 (4.1%)
9 楽しい・にぎやか	5人 (1.7%)
10 親戚に関すること	2人 (0.7%)
11 イベント、地域行事	1人 (0.3%)
その他	7人 (2.4%)
合計	293人 (100.0%)

(寄宮地域が) よくないと思う、と答えたみんなに聞きます。それは、なぜですか？

1 安心・安全な街でない	31人 (37.3%)
2 地域のゴミ、自然が少ない	21人 (25.3%)
3 遊び場や施設の不足	7人 (8.4%)
4 騒音がある	6人 (7.2%)
5 暮らしにくい	5人 (6.0%)
6 地域の人と関わりが少ない	4人 (4.8%)
7 退屈	4人 (4.8%)
その他	5人 (6.0%)
合計	83人 (100.0%)

問12 どんな寄宮地区(おうちの近く)になったらいいなあって思いますか？

1 遊び場、お店の充実	106人 (18.9%)
2 安心・安全な地域	93人 (16.5%)
3 きれいな地域	84人 (14.9%)
4 地域の人との触れ合い	84人 (14.9%)
5 楽しい、挨拶	75人 (13.3%)
6 自然、公園	33人 (5.9%)
7 交通の便	21人 (3.7%)
その他	66人 (11.7%)
合計	562人 (100.0%)

「那覇市寄宮地区（おうちの近く）は住んでいて、いいところだと思いますか」（問11）については、「いいと思う」243人（42.7%）、「よくないと思う」64人（11.2%）、「わからない」261人（45.8%）であった。いいところだと思う理由としては「遊び場やショッピングセンター」88人（30%）、「地域の人との触れ合い、挨拶がある」69人（23.5%）、「暮らしやすい」34人（11.6%）、であった。寄宮地域を「いいと思う」と回答した記述には、「皆が優しいから」（中1女子）、「近所同士仲がいい」（中3女子）、「（お店が）ある程度そろっている」（中2男子）、「なんとなく」（中2男子）等があった。

また、よくないと思う理由としては「安心・安全な街でない」31人（37.3%）、地域の安全を求める回答が挙げられた。「不審者が多い」（中3男子）、「細い路地と街灯が無く暗い」（中1女子）、「自然がない」（中1女子）等の記述があった。

「いいと思う」と「わからない」を合わせると88.5%になり、否定的な意見は少なく、地域にそれなりの愛着を持っていることが分かる。「地域の人との触れ合い、挨拶がある」に関わる記述を69人（23.5%）がしており、地域の人との繋がりを表す回答がみられた。

そして、「どんな那覇市寄宮地区（おうちの近く）になったらいいなあって思いますか」（問12）では、「遊び場、お店の充実」106人（18.9%）、「安心・安全な地域」93人（16.5%）、「地域の人との触れ合い」84人（15.4%）と回答が続く。

遊び場やお店の充実、安全・安心な街への希望とともに、「地域の人がもっと親切になったらいいなと思う」（中2男子）、「近所同士でおしゃべり」（中1男子）など、地域の人とのふれあいを求める声があった。不安と親しみとどちらも感じていることがわかる。

4.8. 子どもたちの欲求

問13 学校で好きなこととしていいよ、って言われたら、何をしたいですか？

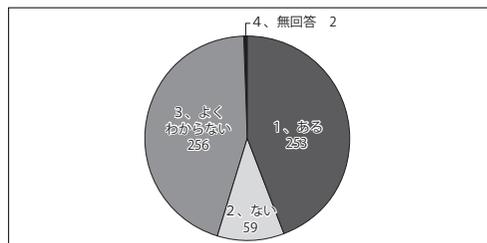
1	遊び、イベント	274人 (37.3%)
2	休息	103人 (14.0%)
3	読書、映画、音楽、絵画、手芸	89人 (12.1%)
4	テレビ、ゲーム、PC、スマホ	86人 (11.7%)
5	スポーツ	79人 (10.8%)
6	ストレス発散、暴力・迷惑行為	25人 (3.4%)
7	帰宅	24人 (3.3%)
8	飲食	22人 (3.0%)
9	勉強	21人 (2.9%)
10	部活	11人 (1.5%)
	その他	52人 (7.1%)
	合計	734人 (100.0%)

問14 休みの日に、やりたいことができるとしたら、何をしたいですか？

1	遊び、イベント	185人 (27.5%)
2	お出かけ（買い物・娯楽）	88人 (13.1%)
3	スポーツ	79人 (11.8%)
4	旅行	77人 (11.5%)
5	テレビ、ゲーム、PC、スマホ	77人 (11.5%)
6	休息	77人 (11.5%)
7	読書、音楽、絵画	56人 (8.3%)
8	自然	13人 (1.9%)
9	部活	11人 (1.6%)
10	勉強	6人 (0.9%)
11	ストレス発散	3人 (0.4%)
	その他	56人 (8.3%)
	合計	672人 (100.0%)

問15 誰かに何かをしてあげたいと思ったこと、ありますか

	1、ある	2、ない	3、よくわからない	4、無回答	合計
合計	253 44.4%	59 10.4%	259 44.9%	2 0.4%	570



それはどんなことですか？

1	ボランティア、親切、高齢者・困っている人の助け	117人 (48.0%)
2	誕生日・プレゼント	41人 (16.8%)
3	友達への働きかけ	24人 (9.8%)
4	両親へ	15人 (6.1%)
5	家族・親戚へ	10人 (4.1%)
6	喜ぶこと	9人 (3.7%)
7	社会問題	7人 (2.9%)
	その他	21人 (8.6%)
	合 計	244人 (100.0%)

「学校で好きなこととしていいよって言われたら、何をしたいですか」（問13）については、「遊び・イベント」274人（37.3%）、「休息」103人（14%）、「読書、映画、音楽、絵画、手芸」89人（12.1%）であり、男子に「テレビ、ゲーム、PC、スマホ」が多く、女子に「休息」が多かった。

男女ともに「暴れる」、「窓ガラスを割る」、「学校中に落書き」等の「ストレス発散、暴力・迷惑行為」25人（3.4%）の回答があった。学校生活において疲れやストレスを感じている子どもが少なからずいることが読み取れる。

「休みの日に、やりたいことができるとしたら、何をしたいですか」（問14）については、「遊び・イベント」185人（27.5%）、「お出かけ（買い物、娯楽）」88人（13.1%）、「スポーツ」79人（11.8%）である。「休息」77人（11.5%）の回答もみられたが、「ストレス発散」については少なかった。この質問は子どもたちの日常生活での欲求を把握するものである。友達と遊びたい、身体を動かしたい、外の世界へ出たい、気持ちを持っていることが分かる。更には、暴力・迷惑行為は日常生活の欲求としては低いが、学校生活において見られるようになることも読み取れる。

「誰かに何かをしてあげたいと思ったこと、ありますか」（問15）については、「ボランティア、親切、高齢者・困っている人の助け」117人（48%）、「誕生日・プレゼント」41人（16.8%）等、様々な回答があった。男子より女子に誰かに何かをしてあげたいと思ったことがある、という回答が多かった。以下記述回答を紹介する。

「今まで迷惑をかけたたり助けてもらった友達に恩返ししたい」（中1女子）

「誕生日プレゼントを渡したい」（中1女子）

「声かけたい。いっぱい幸せにしてあげたいし、楽しませてあげたい。でも、何にもしなくても笑っているだけでいいかなと思う」（中2女子）

「障害を持っている人が困っている時、助けてあげたいと思うけど実行できていない」（中1男子）等がある。

誰かに何かをすることは、その人もしくは社会から認められることであり、子どもたちが一人前の存在として認められたい気持ちを持っていることが分かる。

中学生は、児童期から青年期への移行期にあり、発達段階では思春期（12歳～18歳）といわれ、急速な身体的成長とともに情緒が不安定になりやすい。

精神的自我に目覚めるため、認めてもらいたいという強い欲求をもつ。しかし、自分が思

うように認められないこともある。思春期の子どもが社会に貢献し認められることは、大きな意味がある。

4-9. 結果

以上のアンケート結果より、寄宮地域の世帯の状況として、核家族とひとり親世帯が多いことが挙げられ、仕事や家事に忙しく子どもと向き合う時間がとりにくい親が多いのではないかと考えられる。

また、朝食が安定していない子どもや世帯全員が揃う機会が少ないなど、食生活と世帯のメンバーが安定していない子どもの生活実態も見られる。内閣府（2013）の調査を参考にしても、暮らし向きにゆとりがない世帯が一定程度在る、と考察できる。

生活環境は家庭と学校に偏っており、スポーツや勉強で活躍の機会を見つけにくい子どもの自己肯定感は高くないと考えられる。学校生活でストレスを抱えている子どもが一定数みられた。居場所については自室を中心としており、個人化・個別化の傾向がみられた。

人間関係においては、子どもと大人に分かれており、大人との人間関係は家族や親せきが大部分であり、地域の大人やお兄さんお姉さんの存在がみられなかった。寄宮地域には大学も立地するが、大学や大学生との関わりが読み取れる記述はなかった。

大人へのメッセージはハッキリ持っており、「一人前に（大人として）認識してほしい」というメッセージが強く読み取れた。

地域の大人との関係は、関わりを持っている子と関わりを持っていない子に分かれ、地域の大人と関わりを持っている子と地域の大人との関係は、ある程度良好であり、地域の将来においても地域の人との関わりを求めている記述が多数あった。

寄宮地域については、強い愛着を持っているわけではないが否定的な意見は少なかった。一方で、「安心・安全な街」を求める声もあり、子どもたちの潜在的な不安感も読み取れた。

「誰かに何かをしてあげたい」という意欲を問う質問においては、具体的な回答が多く、子どもたちが行動意欲や貢献意欲を持っていることが読み取れた。しかし、「誕生日・プレゼント」といった家族や友達を対象としたものが多く、第三者や社会へ働きかける機会が少ないこともみられた。

こうして、寄宮地域の子どもたちは様々な欲求をもっているが、現状では限られた人間関係と限られた生活空間で過ごし、満足に能力やエネルギーを発揮できずにいると考えられる。一方の大人も生活に追われ余裕が無いようである。子どもも大人も可能性は持っているが、現在の地域環境では十分に生かされていないことが明らかになったと考える。

今回の調査では睡眠に関する設問はないが、子ども達の詳しい生活状況を考えるためにも睡眠についての調査も今後求められる。

5. 調査から見えてきた課題及び今後の展望

5-1. 子どもの生活空間、関係の変化

今回のアンケート調査では、那覇市国場及び長田の周辺にある小中学校を中心に行ったが、那覇市の中心部からは離れているとはいえ、都市における特有の課題を反映している。全体としては、子どもの生活空間である「家庭」「学校」「地域」それぞれにおける人間関係、及びそこでのコミュニケーションの質が希薄化している状況が明らかになった。

かつては、子どもが暮らす生活の場である「家庭」「学校」「地域」は濃密な人間関係によって満たされ、尚且つその中心は子どもであった。

しかし、例えば「家庭」であれば「核家族」及び「ひとり親世帯」が多くなり、親と子のみの世帯が多くなっている。しかも、親の生活は長時間労働と低所得による不安定さの中で、子どもとジックリと向き合い関わりあうことが少なくなっている。

そのため、生活の中でもっとも安定し安らげる場である家庭が、子どもにとって落ち着けない空間となってしまうという現実がある。

子どもに期待される最も大切な要素は「生きる力」であると考えられているが、それは具体的にはどのようなものであるかを考えた時、人間がごく自然に繰り返す行動、反復して行う日常的な行動だと考えてみると「生きる力」とは、「呼吸すること」「食べること」そして「寝ること」の3つだといえる。

この「呼吸（息）すること」「食べること」「寝ること」は、生活基盤となる生活時間や生活リズムを作り出していく中心的な行動である。

今回の調査では「食事」に焦点を当て調査をしたのだが、その乱れがかなり明確になっているように思われる。

食事は三度三度、おおよそ6時間の感覚をとって回転していく。午前7時前後に朝食をとり、昼の12時から午後1時にかけて昼食をとり、夜は午後6時から7時にかけてとることになる。

この規則的なリズムは、生活のリズムを作り出し、生理的な循環を作り出していく。それに加えて、睡眠の時間が重なり、朝起きる時間と夜眠る時間が加えられ、一日の生活リズムができる。いわば、朝起きる時間、朝ごはんの時間、そして昼ごはん、夕ごはんの時間、そして夜寝る時間を繰り返し人間は生きていく。その意味で、この5つの定点を軸にして子どもの生活は成立しているのである。

しかし、現代社会における生活のリズムは、夜型社会へと大きく変質し、しかも大人（親）の労働時間及び内容の変容によって子どもの生活リズムも大幅に崩れてしまっている。人間にとって安定した労働条件及び労働内容は、日常生活に影響を与えるのであるが、低賃金、長時間労働が一般化し、親の生活時間が乱れてしまっているのが現状である。

家庭には、子と親、そして祖父母と一緒に暮らすことによって、人間関係の幅があった。しかし、都市化現象は、家族の形態を「核家族化」し、親と子だけの関係に単純化してしまっ

た。しかも安定した老动画保障されない中で、生活も不安定となり、「ひとり親家庭」も増加している。

父親または母親が一人で労働もし、子育てもするという過重な家族生活が一般化してしまったのである。

今回の調査からもこの傾向は明確であり、特に家族の一家団欒である「夕食」の時間に家族全員が揃わないという現実が多く見られる。食事は人間（子ども）にとって、その成長にとって必要な栄養を摂るだけではなく、人間関係をも学ぶ大切な場である。

人間の基本的な差異である男女、そして年齢による差（世代の違い）がある家族の構成員が集まり、暮らすことによって、人間関係の基本を学ぶ場が家庭でもある。

しかし、親と子のみ、少数の兄弟姉妹という「核家族」の中では、柔軟な人間関係を体験することができない。特に夕ご飯を子どものみで食べている場合、さらに家族以外のその他と食べているという場合がみられることは、厳しい家庭の崩壊現象を示しているといえる。

夕食の時間を聞くことはできなかったが、親の帰宅時間が遅くなっていること、また夜の時間帯にテレビやパソコン、ゲーム、スマホ等が入ってくることで睡眠時間も遅くなっていることは充分予測ができることであり、疲労を取ることもできない状況が核家族には多くなっているように思われる。

こうして、親と子の関係にすべてが収斂してしまうため、双方に余裕がなく、ささいなことでもぶつかってしまったり、ゆっくりと受け入れる余裕もなくなっているのが現状と思われる。

また、子どもの生活空間として重要である学校での状況についてみると、それほど苦しんでいるという内容が見えてこない。

子どもにとって「ほっとできる」ところは「家庭」であり、しかも自室やベッド、風呂、トイレなど一人でいられる空間が多い。

また、得意なことについては男女ともにスポーツが多く、部活やクラブが学校生活の中でエネルギーを発散できる対象になっている。

また、自分のことを大切に思ってくれる人、好きな人についても「家族・親戚」が多く、「先生」を挙げた子どもが少ない。

学校で好きなことをしてよい、と言われたら、及び、休日に何をしたいか、という問いには、友達と遊びたい、という回答の他にストレスを発散するような回答があり気になった。

子ども達は、学校生活においてもかなり疲れておりストレスを感じているのではないかということが容易に推測できる。

ただし、子ども達は友達と遊びたい、身体を動かしたいなど、エネルギーを発散して何かしたい、という思いも多くあるということが伺われる。

その上で大人に対して「子ども扱いをしないでほしい」「もうちょっと構ってほしい」「ストレスを押し付けしないで」とも書いている。つまり、子ども達は、大人達に一人前に認めて

ほしいと願っているということなのだと思う。

こうした子ども達の思いは、地域に対しても「分からない」と回答する数が最も多く、地域との関わりが希薄になっていることが分かる。

しかし「分からない」ではあるが「嫌い」など否定している回答も少ない。

近所の人たちとのつながりや声掛けを求める声は意外にも多く、子ども達は「学校」や「地域」の中で周囲の人たちに認められたいと思っているのだということも浮き彫りにされたと思われる。

こうして、子ども達の生活空間である「家庭」「学校」「地域」をみてくると、家庭に関する思いが最も強いことは明確になったが、その家庭に子どもと関わりあう余裕がなく、親もまた生活に疲れていることも浮かび上がってきたと思われる。

5-2. 子どもとの新たななかかわりの創造

子ども達の生活空間から見えてくる限り、子どもの生活環境は「家庭」と「学校」に限定されており、それ以外の「地域」における生活空間もなく、極めて限定された人間関係と生活空間の中におかれているということが明白になってきている。

したがって、大人の側（親や教師）も疲労しストレスとか変えているのではないかと考えられ、子ども達もゆっくり休めたり、エネルギーを発散できる場もなくストレスを抱えているという全体の構造が見えてきた。

こうした現状の中では新たな関係と空間の創造が必要になる。

子どもの成長にとって、多様な人との関わりはきわめて重要なのだが、子ども自身のロールモデルになる青年、若者との出会いが大きいことは心理学や発達学の面からも実証されている。

将来のモデル、それも同様な成長をする可能性のある身近な青年に出会うことで、子ども達は自分の進むべき方向性を見つけることができる。

高校生、大学生あるいは若い青年労働

者との出会いの場が、小中学生にとって大切であるというということである。

また、子ども達の生活の場は「学校」と「家庭」に集中してしまっており、それ以外の生活の場も必要になっている。

例えば、小中学校学生が集まれる「児童館」や「青少年センター」、様々な交流センターのような場、体験のできる場などである。

また、地域の中に公園や体育館があったり、自然に触れられる場、動植物と関わったり農場などの体験ができる場があれば、それは「家庭」と「学校」との間にある「もう一つの場」として子ども達がエネルギーを発散させ、関係と体験を拓げる場として求められていると思われる。

かつて寄宮中学校区を中心に「豊かな心でたくましく生きる力の育成」を目指して「ハー

トフル地区」を創ろうという実践が行われたことがある。

1999年度から2001年度にかけて文部省、那覇市教育委員会の指定を受けて行われたこの実践活動は、地域の幼稚園、小学校、中学校と教育委員会、さらに地域の方々との協力で3年間取り組まれたものである。

この研究実践のテーマ設定の理由として「幼児児童生徒が学校・家庭・地域から体験を通して学ぶことにより、豊かな人間性や生きる力を培うために、実践活動地区（寄宮中学校区）と那覇市教育委員会の連携による研究活動を進めていきたい」と述べている。

そして、1999年7月3日（土）に300名の参加者のもと「地域フォーラム」を開催している。そのフォーラムの中で「子どもたちに豊かなふるさとを」のテーマのもと、4つの「地域づくりの提案」を行っている。

その内容は①「クリーンな地域（まち）」、②「ハートフルな地域（まち）」、「ボランティアネットワークのある地域（まち）」、④「学園文化都市をめざす地域（まち）」である。（詳細は3章を参照）

こうした4つの提言をもとに地域がまとまり、2000年11月18日（土）には「寄宮まつり」が開催されている。

ここでは、実行委員会がつくられ、寄宮十字路通り会、真和志まちづくり委員会、学校道徳推進委員会が共催し、小中学校のPTA、沖縄尚学高等学校、沖縄女子短期大学、沖縄大学、真和志自治会連絡協議会が協力している。

そして、幼児、児童、生徒の演舞演奏。高校生、大学生の演舞演奏。地域団体の演舞演奏が行われ、バザー、フリーマーケット等が行われ、この地域をクリーンでハートフルなまちにしようと、それ以後「寄宮まつり」がおこなわれてきたのであった。

この時の地域の盛りあがりを見ると、持続的な活動が必要だったと思うのだが、現在こうした地域の活動はなくなっている。

沖縄大学地域研究所の共同研究班として、今回の実態調査を行うことによって、このような歴史についても発見することができ、現在この地域の小中学生の成長にとって最も必要な、子どもと大人をつなぐ中間としての高校生、大学生、青年との交流の場をつくること、また地域と学校をつなぐ地域との協働によるあらたな子ども若者支援のプランを作りあげることの大切さを痛感させられている。

考えてみれば、この地域には、幼稚園、保育園から小中高校、そして大学まで揃っている沖縄県内では稀有な地域であり、かつて地域フォーラムで提言された「学園文化都市」として再生することが可能であると思に至っている。

5-3. 今後の展望（地域資源の再発見）

今回の調査で子ども達は、自分の役割を発見することができず、疲れているという状況にあることが分かった。もっと、自分たちに何かやらせてほしい、挑戦したい、役立ちたいと

も思っていることが伝わってきた。

その意味では、地域に今まで気づかずにあった自然環境や、伝統文化、芸能あるいは技術、職業などを掘り起し、地域の行事などをもう一度再興することを通して、小中学校、大学を中心に、子ども達、若者達が中心になる地域づくりを始めることが出来ればよい。

今回の調査は、沖縄市で行われた小中学生の実態調査とほぼ同じ内容で行ったのだが、傾向としては類似しているが、特徴的なことは、地域への否定的な意見が少なかったことである。さらに地域を知り、地域で暮らす人々と交流し、地域を自然豊かなハートフルで暮らしやすい地域にしようという潜在的な可能性が、この地域にはあるという発見があった。

今回の調査報告を、できれば沖縄大学の地域研究所で行った後、地域の方々、また大学生にも聞いてもらい、できれば学園都市、文化都市としての「地域づくり」のための協議会をつくり、多くの方々の意見、アイデア、そして夢を語り合い、子ども若者にとって住みやすい地域づくりへと実践化したいと考えている。

今回の調査に至るまで、数年間、子どもの居場所に関する研究と調査を続けてきたが、沖縄大学の地元の地域で具体化させたいと考えて取り組まれたプロジェクトである。

まだまだ調査の足りない部分もあるので、さらに多くの研究者、学校、地域の方々のご協力を頂きながら、実践と研究を深めていきたいと考えている。

ご協力を頂いた寄宮中学校の先生方、生徒さん、また、上間小学校の先生方、生徒さんに心から感謝を申し上げ、よりよい地域づくりが実践できればと念じている。

注

- i 『第52回那覇市統計書』(2012)「17. 世帯の家族類型別一般世帯数、一般世帯人員、親族人員」における「18歳未満の親族のいる世帯数」(34,215世帯)と「18. 子供の数別母子・父子世帯数及び人員」における「総数」(3,281世帯)により、那覇市のひとり親家庭の割合(9.6%)を算出した。
- ii 『平成17年国勢調査』(2005)「第12表 世帯の家族類型(22区分)別一般世帯数、一般世帯人員、親族人員及び1世帯当たり親族人員、47沖縄県」における「18歳未満の親族のいる世帯数」(162,838世帯)と「第9表」、「第10表」における「母子家庭数」(14,931世帯)「父子世帯数」(1,911世帯)により、沖縄県のひとり親家庭の割合(10.3%)を算出した。

参考文献・引用文献

1 章

『平成23年度沖縄市こどもの実態調査報告書』沖縄市 2012年

『那覇地区③「こども110番の家」マップ』那覇地区「こども110番の家」連絡協議会・那覇警察署 2012年

2章

『真和志市誌』新垣清輝 真和志市役所 1956年

『寄宮中学校50周年記念誌』那覇市立寄宮中学校創立記念誌委員会 2005年

『国場誌』国場誌編集委員会 2003年 国場自治会発行

『上間誌』上間誌編集委員会 2009年 上間自治会発行

『平成24年度那覇市の教育』那覇市教育委員会生涯学習部 2013年

『「地域の子は地域で育てる」ための具体的な施策の推進を図る～子ども・若者が輝く地域づくりを中心に～提言』沖縄県社会教育委員の会議 2006年

3章

『那覇市子ども会5周年記念誌』那覇市子ども会連絡協議会 1984年

『那覇市子ども会10周年記念誌』那覇市子ども会連絡協議会 1989年

『学校教育目標の達成をめざした生徒指導のありかた』那覇市立寄宮中学校 1989年 昭和62・63年度文部省指定生徒指導総合推進校 研究資料

『那覇市子ども会20周年記念誌』那覇市子ども会連絡協議会 1994年

『平成10、11、12年度文部省指定道徳的実践活動地区（ハートフル地区）推進研究報告書』那覇市立寄宮中学校 2000年

『30年のあゆみ 創立30周年記念誌』那覇市子ども会連絡協議会 2004年

『ハートフル広報 文部省指定 ハートフル地区』那覇市教育委員会学校教育課 1998年

4章

『第52回那覇市統計書』那覇市（2012）那覇市ホームページ <http://www.city.naha.okinawa.jp/kouho/toukei/pdf/toukei2012.pdf>

『平成17年国勢調査』総務省（2005）政府統計の窓口 <http://www.e-stat.go.jp/>

『食育に関する意識調査』内閣府（2013）内閣府ホームページ <http://www8.cao.go.jp/>

『系統看護学講座 専門分野Ⅱ 小児看護学1』奈良間美保 他 2014年